

うな状況であつたらうと想像されます。

私の身代わりとなつた鈴木、西川両戦友、また福島少尉の当番兵でありながら見失つた責任は、生涯頭から去ることはありません。

ビルマ各地で転戦し、命を長らえて終戦を迎え、バンコク港からアメリカ軍のリバティー船で鹿児島港に入港し、昭和二十一年六月二十七日自宅に帰ることができました。

あの悲惨な無茶苦茶な戦争を二度と起してはならないと心に決めております。後年四回ビルマの戦跡巡りに参加することができましたので、戦場跡各地で花を供え、安らかなご冥福をお祈り致しました。

亡き戦友の 冥福祈り 香を炊く

合す両手に 涙溢るる

許せよと 花を捧げて 詫びながら

過ぎしあの日の 戦偲びて

逃げまどう あの日のことを 思い出し

二度と起すな 悲劇の戦

## マラリア病が私の命を救つた

長崎県 木下 豊吉

昭和十二（一九三七）年七月七日、突然支那事変が勃発し、世の中が騒然となりました。私たちの住む田舎町でも赤紙の召集令状により、三十代の働き手が出征して行きました。

私は大正十二（一九二三）年十二月十日、農家の三男坊として生を享けました。そして昭和十三年三月、大三東小学校高等科二年を卒業しますと、知り合いの紹介により長崎市の菓子屋に、菓子作りの見習として就職しました。

支那事変の戦火は日ごとに拡大し、昭和十六年九月の初め、私にも白紙の召集令状がきました。それは佐世保海軍工廠の徴用工として勤務することでした。仕事は海軍工廠に勤務する人たちの加入している民間保険料を、給料から天引して納入する仕事で、肉体労働ではなく助かりました。

昭和十六年十二月八日未明、海軍マーチの前奏と共に太平洋戦争勃発がラジオニュースで報道されました。支那事変に次で太平洋戦争に突入、世間ははいよいよ騒がしくなりました。佐世保軍港に出入りする艦船の動きも日ごとに激しくなりました。工廠からも、陸海軍に召集された若い人たちが次々と入隊、入団して行きました。当時のラジオから流れる連戦連勝のニュースは若い私たちの血潮を湧き立たせ、「よし徴兵検査を待たず一日も早く御国のためにこの身を献げるぞ」と、志願することを決意しました。両親は年齢も若く、世相が軍国調一色になりつつあったときだけに、反対もできず私の願いを聞き入れてくれました。

昭和十七年十月、島原市の島原中学校講堂で身体検査が行われ、残念ながら乙種合格でしたが、検査官からは「来年早々には召集令状が来るであろう」と、そっと教えられたので、安心して佐世保海軍工廠の職場に帰りました。

このころはガダルカナル島の攻撃が始まり、我

が軍の南方での作戦は、まだ有利に進んでいました。しかし十二月末にはガダルカナル島の撤退が発表され、昭和十八年の年明けと共に、南方作戦も次第に厳しくなってきました。

昭和十八年三月三十一日、私に待ちに待った召集令状が届きました。四月十日、大村市の歩兵第四十六連隊に入隊せよとの内容でした。その前日の四月九日、大三東駅前には、召集兵、現役兵、志願兵の入隊の人たちでごった返していました。一日でも早く御国のためにと志願したものの、涙一つ見せず送ってくれる両親のことを考えますと、思わず涙が流れました。その日は村役場の兵事係も諫早市の道具屋旅館まで見送ってくれました。

翌十日十時、みんなそろって大村第四十六連隊の営門をくぐり入隊しました。私は第六中隊に配属され、班の人員は初年兵十三人でした。

入隊当日は古兵から歓迎され、いろいろ親切に教えてもらいましたが、二日目からは朝六時の起床から夜九時の就寝まで忙しいこと。ぐずぐずし

ていれば怒鳴られる。返事が悪い、質問に返事がないと叩かれる。軍人勅諭の暗唱、兵器の手入れ、古年兵の世話、朝昼夜の飯上げ、内務班の掃除、軍事教練の厳しき、夜の点呼時には叱られ、叩かれる毎日という男同士の生活が始まりました。軍隊の厳しきは事前に聞いていたが、こんな厳しいのなら志願までして来るのではなかったと思うこともありました。一人間違えれば連帯責任だと全員が叱られ叩かれたり、対抗ビンタで向き合って叩き合うことなどいやな思いが度々しました。

大村第四十六連隊は、九州部隊でも最精銳といわれる強い部隊だけに、訓練も厳しく、内務班教育も厳格でした。一期の検閲も終わったころ、非常呼集がかかり南方移動が告げられました。連隊長から「南方戦線の厳しさの中で何人の者が生還出来るか分からないが、御国のために粉骨砕身せよ」との訓示を受け、忠霊塔に参拝、大村駅から夜、軍用列車に乗車しました。

八月二十九日早朝、門司港駅に到着、ここには

各地から大勢の兵隊が集結しており、停泊中の輸送船には武器弾薬、トラックなどの積載作業が始まりました。

乗船した船室は二段に板が張られ、背延びすると頭がつかえ窮屈なくらいで、いろいろの物資を満載した四隻は船団を組み、駆逐艦に護衛され出港しました。遠ざかる九州の山々を見ながら、これが見納めかなあと思いながら東シナ海に出ると波も荒く船酔いする者も出てきました。そして波に揺られながら南のどこで、どのような戦争をすることになるのかと、毎日が不安で夜も寝つかれませんでした。途中で台湾の馬公軍港に寄港し、一週間ぐらい休息し、食糧等の補給をして再び出港しました。十月一日船中で一等兵に進級、階級章をもらいました。

船団はタイ国のメナム河の河口の港バンコクに寄港しました。上流には日本の軍艦の姿も見えませんでした。十月四日、シンガポール港に到着しました。門司港を出港以来三十五日、空襲も米潜水艦の攻

撃も受けず、無事到着しました。

シンガポールは昭和十七年二月十五日に日本軍が占領してから「昭南」と命名されています。立派な港で日本の軍艦や輸送船も数隻入港していました。そして昭南に上陸して部隊の編成が行われ、一方では戦況の推移を見つつ、仮兵舎で訓練を受けながら駐留しました。こうして南方に來たが、どこの戦場に行くのかと考え、不安と心配で眠れない夜もありました。昭南で正月を迎えたのですが行先はまだ分かりません。ただ戦況はタイ、ビルマの戦線で、日本軍が連合軍と激しい戦を交えているらしいということぐらいでした。

一月中旬に移動命令が下り、昭南駅から軍用列車で出発致しました。途中マレー半島のクアラ Lumpur で下車、身体検査のため三日間休養となりました。近くに楽しいペナン島があるので見学に行く許可を得てグループで見学に行きました。マラッカ海峡に浮かぶペナン島は、歴史の古い寺院等もあってすばらしい島でした。感激したのは、

日本人経営の造船所が健在で、こんな島にまで日本人が進出しているのに頭の下る思いでした。

その後、クアラ Lumpur から軍用列車で一路マレー半島を北上しました。マレー半島は昭和十七年一月、日本軍によって平定されており、心配なく北上することが出来、昭和十九年一月二十日、マレー・タイの国境を通過しタイ国に入りました。

列車は主要駅で食糧などの積み込みのため一時停車を繰り返しながらタイ国内を走りました。さらに二月一日、タイとビルマの国境を通過、ビルマ国内に入り、二月七日、ビルマのタイパカ駅に到着、下車しました。そしてこのタイパカ駅には、歩兵第五十五連隊第六中隊に配属を命ぜられました。原隊は私たちが入隊しました大村連隊で、九州出身の人たちが多かったようです。

このビルマでは、今まで考えたことのないような激しい戦争が待ちかまえていました。我が軍は昭和十七年三月八日、ラングーンを占領していましたが、連合軍の反撃は激しくなり、日本軍隊が

動く度にビルマ全土に渡り戦火が広がり、そして私たちは歩兵部隊ですから歩いての行軍が始まりました。昼間は暑く夜は冷え込むという大陸性気

候の中を、完全軍装での行軍、腰には前後に実弾を下げて、肩には三八歩兵銃を担ぎ、背中には重い背のうを背負い、それは大変な重量でした。制空権は連合軍が握っているため飛んで来るのは米空軍機ばかり、日本軍を見付けると機銃掃射を浴びせ、逃げ回る重い装具の兵隊は逃げ遅れ、被弾死亡する兵士も多くなります。そして敵機を避けるため昼間はジャングルに身を潜め、夜になって目的地向って行軍します。しかし敵がどこで、どのようにして見張っているか分からず、マッチも使用出来ず、タバコも吸うことが出来ません。

山道の狭い道路をはうように行軍し、耐えきれない者は落伍して見捨てられます。夜営にも木を切ってひもでくくり組み立て、椰子の葉で屋根を作り、雨をしのぐ程度でしばらく休養をとりました。蚊が飛んで来て容赦なく刺す。疲れきった体

は追い払いもせず寝込んでしまいます。タイパカを出発して二カ月もたたないうちに、マラリアで身動きできない者も出始めました。

後日分ったことは、米国、英国、中国の三カ国は、インドアッサム州と、中国雲南省を結ぶレド公路再開のため、昭和十八年十月には、北部国境を越えてビルマ国内に進攻し、さらに中国の雲南省からも中国軍がサルウィン河を渡って、東北部から進攻を開始したのです。このため雲南省の守備についていた日本軍第五十六師団の一部が拉孟方面において激戦の後全滅したとのことでした。

一方、ビルマ西部インド国境地区のイギリス軍は、インパール及びアキャブ方面にそれぞれ兵力を集中し、ビルマへの進攻準備を進めているとの情報に、日本軍は昭和十九年三月、チンドウイン河を渡りインパール進攻作戦を開始したのです。

私たちの部隊はこの作戦に呼応するため、南から北へ急進撃を敢行しましたが、連合軍の守備は固く、土地に不案内の上に制空権を持たない日本

軍は連日空襲、空爆を受け前進ができない。五月ごろからビルマ特有の雨期に入り、連日の雨と河川の氾濫で前進を阻まれてどうすることもできなくなりました。

雨のためずぶ濡れになりながら泥水に腰まで浸かり、歩兵銃を両手で支えて川を渡る姿は、敵にとっては良き餌食と発砲する。敵弾を受けて濁流に吞まれて流れて行く。助けようにも助けられない惨めさに無念の思いがいっぱいでした。

日本軍は第三十三師団がインパール南方から、第三十一師団は北方コヒマ方面に、第十五師団は中央から進撃しましたが、イギリス軍四個師団は圧倒的に優位な航空兵力の支援を受け反撃に転じ、砲撃、爆撃、戦車攻撃のイギリス軍に対し、日本軍は弾薬も食糧も兵力の補給もなく、ただ肉弾での抵抗では損害が続出し、ついに七月七日、ビルマ方面軍は作戦中止を命令しました。

インパール作戦に参加した部隊は、再びビルマ領内に撤退することになったのです。雨期に入り、

河川は氾濫し、長期の行軍と飢餓で体力の衰えた将兵は、折り重なって倒れ、河川や密林の中は、日本兵の死体で埋まったといわれるほど、悲惨な敗北となりました。インパール作戦で敗北した日本軍は南へ後退、進撃して来る連合軍とビルマ領内で激戦が展開され、その悲惨さは筆舌に尽くし難い状況でした。

地名を覚える暇もないくらいの転戦また転戦、雨の中を泥まみれになっての後退で、負傷者や病人も続出しました。七月中旬になって私は高熱で苦しみました。熱が出てふるえが始まり、衛生兵は、マラリア病の病状だといって野戦病院に案内されました。

粗末な名前だけの野戦病院には、負傷兵や私のような病人でいっぱいでした。薬をもらい休養しますが連日の疲労と栄養不足のため病状は回復せず、四日ほどで野戦病院から大きな陸軍病院へ移送されました。この病院はラングーンの病院とのことでした。設備も立派でした。

病室で耳に入るのは、日本軍の苦戦の情報ばかりで、地下室には戦死者の手首の入った白木の箱が室いっぱい並べてありました。白木箱に手を合せご冥福をお祈りしました。しかしこの方々はまだ良い方です。濁流に流されて亡くなった人たちは、夜行軍で落伍して見捨てられた人たちの遺品は何一つない。まことに気の毒に思いました。明日は我が身かと心細く感ずる入院の毎日でした。

入院して一カ月余り、やっと熱も治まり、退院し原隊に帰りました。戦友から留守中のことを聞いて驚きました。連合軍と戦火を交える度ごとに初年兵が次々と戦死したとのことでした。

私たち擲弾筒班は行軍の際には腰の前後に実弾を四方所に提げ、背中に筒を担いで歩きます。このため空襲や敵襲の場合には気軽に動けず、逃げ遅れて犠牲になる可能性が多いのです。攻撃の場合には腰を曲げる程度ですから、発射するための目標になりやすく犠牲者も多く出ます。

私はマラリア病で四十日ぐらい入院したため、

戦闘に参加できませんでした。この四十日間が私の生命を救ってくれたのではないかと、思わず手を合せ感謝しました。九州部隊の精鋭と称された大村部隊も連合軍の最新兵器と物量の前には手も足も出せず、後退せざるを得ませんでした。その度ごとに戦死者、負傷者も出ました。後退中勝手に日本人墓地があり、内地の墓地と同じような石碑で懐かしく、こんな所にまで日本人が進出していた偉さを思いました。

戦場を拡大し過ぎたため、武器も弾薬も食料も医薬品も、そして人間の補充もできず、八月十五日の終戦を迎えました。「終戦になったぞ！」と知らされました時は「残念」と思うと同時に「ああ助かった」とも思いました。無茶苦茶な戦争が終わったとも思いました。そして第五十五連隊も中隊ごとに武装解除され、裸にされた日本軍はこの先どうなるんだろうと不安になりました。

昭和二十年九月一日、兵長に進級しましたが、新しい兵隊の補充がなかったので、初年兵のまま

の兵長でした。そして九月二十六日、第十八師団参謀本部に配属させられ将校当番を命ぜられました。万年初年兵の兵長が将校当番と笑われました。捕虜という汚名を受けましたが、連合軍の捕虜に対する態度も、思いのほか寛大で、作業も重労働でなく、食事もまああの食事で腹を満たしてくれました。兵隊たちの顔にも日ごとに笑顔が出現しました。

昭和二十一年六月二十三日、ラングーン港に集結し、輸送船に乗船し、恨み深いビルマを後にしました。遠ざかるビルマの陸地を眺め、この地で戦死された多くの方々の御冥福を祈りました。

(ビルマ方面作戦に参加された陸海軍部隊は総兵力二十三万八千人といわれ、その中戦死された方々は十六万七千人といわれています)

復員船の中では広島と長崎に原子爆弾という恐ろしい爆弾が落ちたそうだと、日本はこの後どうなるのだろうか、心配する声や、帰ったら花嫁探しをせねばとの笑い声を乗せて、七月十日宇

品港に到着しました。

消毒検査を受け、夜、復員列車に乗車し九州へと向いました。翌朝諫早駅で鳥鉄に乗り換え、大東駅に八時ごろ到着しました。飛ぶようにして我が家に駆け込みますと、両親や家族は元気な私の姿を見てびっくりしながらも「お帰り、よかつた」と喜んでくれました。仏壇にもご先祖様がお守り下さった御札を申し上げました。

復員後は家業の農業を手伝いました。帰ってからも何回かマラリア病が再発しましたが、このマラリア病で四十日間入院したおかげで、この命が助かったのだと苦笑いしながら治療しました。

今ではもう再発することはありませんが、ビルマでの思い出は消えることなく、空爆で逃げ回ったこと、狭い山道を夜行軍で歩いたこと、雨に濡れて濁流の中を流されまいと一生懸命渡ったことなどが時折夢に出てきます。そして私たち以上に苦しい戦闘の中、戦死された方々のご冥福をお祈りすることを忘れてはならないと思います。